

沢木耕太郎の「深夜特急」に感化された20代の私は、初めての海外旅行に一人で行き、西欧を放浪した。

ロンドンから南下すること100キロのワーキングでホームステイしながら英語学校に3週間通ってから、ヒースロー空港からスペインのマドリッドに飛んだ。ブリティッシュ・エアウエイズの飛行機から眺めるスペインの大地は、赤や黄や緑の土と、オリーブの木々の深緑が点々と強くコントラストを成し、機上から見るだけでその大地に魅せられた。

マドリッドでは、まず行きたかったシビラという服の本店に行き、予想とは違ってこじんまりと誰もいなくてただ猫がひなたぼっこしながら店番していて、「ああこういう空気の中でこの服達は生まれたのだ」と何も買わずにただひたすら空気を感じた。プラド美術館に通ってはピカソの「ゲルニカ」やゴヤの「裸体のマハ」や「着衣のマハ」と時間を過ごし、ディナーは女性一人では無理だがランチだったら入れるので食堂に通っては辞書を片手にメニューと格闘して「一の皿」と「二の皿」を選んだ。外れることもあったが、総じてスペイン料理は安くておいしかった。エル・コンテ・イングレという大手スーパーで夜ご飯と朝ご飯用のヨーグルトとフルーツを買い込んで地元民になりました。

そうして一息ついてから、トレドを初めとしてスペインを回った。コルドバでしましまのロールケーキのようなメスキータを見てイスラムとヨーロッパの織りなす異文化を肌で感じ、セビリアでフラメンコを見、グラナダでアルハンブラ宮殿に迷い込んだ。アルハンブラ宮殿を形作る欠品のどれもが愛おしくて写真を撮りまくった。たまたま出会った日本女性とで地元のサクロモンテの丘に住む男性と知り合い、その家に寄らせてもらった。サクロモンテの丘から眺めるアルハンブラ宮殿は本当に赤い宮殿だった。バレンシアのオレンジ、バルセロナのガウディ、フィゲラスのダリ、そのどれもがスペインだった。

帰国するためにパリに戻る日程が迫っていたので、慌てて鉄道でニース、モナコ、ミラノ、ベネツィアと回り、そのどれもがよかったのだが、スペインほど私を引き寄せるものはなかった。パリに着いてその物価の高さとフランス人の英語蔑視を経験して、「ああ、もう少しスペインにいればよかった」と後悔した。過ぎてしまったものは戻らない。戻って旅することはできない。帰りの「パリ～成田」の航空券しか決まっていなかったのだから、自分の感覚を信じてもう少しスペインを放浪していればよかったのだ。

もう30年近くも前に経験した、あのスペインはまだあるのだろうか。再びスペインを訪れることはできるのだろうか。スペインからやってきた、ローズマリーのアロマオイルの小瓶を片手に、スペインという世界遺産に私は恋焦がれている。